

# 沖公祐『余剰の政治経済学』第5章「労働力商品化の多型性」\*

江原 慶†

2012年11月15日

## 1 労働力商品論の構成

### (1) 労働力商品の単純化

『資本論』の労働力の価値規定の前提

- 労働過程の単純化
- 生活手段の完全な商品化（〈再生産〉過程の単純化）

→ 労働力の外部性＝過剰性という観点を活かさない

### (2) 「非資本」としての労働力

『要綱』での労働理解

- 対象化されていない労働＝生きた労働（←→ 対象化された労働＝資本）
  - － 「非資本」としての労働（力）：一定の限られた力の発現を売買・価値形成を目的に売買
  - － 奴隷：力の発現の総体を売買
  - － 用役給付：消費を目的として売買

→ 労働（力）の商品化は資本主義に固有でないという認識。

but 『資本論』で労働と労働力の区別が打ち立てられるにつれ後景化

### (3) 「非所有」としての労働力

＝『資本論』の「二重の意味で自由な労働者」

→ 資本主義の理解にとって二重の限界

- 用具の所有と熟練が結びつけて理解されていたため、生産手段からの自由＝熟練の解体された単純労働者の想定に
  - 熟練が労働で果たす役割を看過
- 生活手段の非所有の想定により、労働者の生存の問題を雇用の成否に還元
  - 労働者が資本以外と関係を結ぶ可能性を排除

## 2 労働力の価値規定

### (1) 賃金理論と人口法則

『資本論』の労働力商品の価値規定

- 「労働力の所持者の維持のために必要な生活手段の価値」

---

\* 2012年度小幡ゼミ

† 東京大学大学院経済学研究科博士課程

- 「労働者の子供の生活手段」の価値
- 養成費

but 古典派の人口法則は放棄，相対的過剰人口の形成を指摘し，「賃金の運動と労働力供給の結びつきを断ち切る」(175 頁)

→2つの態度

- 労働者の家族を産業予備軍と見なし，賃金と労働力供給の間接的な結びつきを認める  
→ 古典派人口法則批判の有効性を損なう
- 賃金で生活手段を購えない過剰人口の存在を指摘，賃金による生活手段の取得と労働力の形成を断絶  
→ 「非所有」規定の労働力の発想ゆえ，窮乏化法則論に

## (2) 労働力価値規定の再検討

### ■労働者の生活手段の獲得経路

$$Mv = P^T$$

1. 賃金による生活手段の購買
2. 収入の再分配
  - (a) 移転
  - (b) 用役給付
3. 資本—賃労働関係の純粋な外部

↓

- 過剰人口の持続的な滞留
- 過剰人口の存在にもかかわらず，資本が生活手段を労働者に保証しなければならなくなるのは，労働力が多様な商品群だから

### ■養成費

- 技能や熟練の形成には必ずしも費用は伴わない (← 「非所有」規定の影響で看過)
- 資本が養成費を支払って技能が形成するにはリスクが伴う

→ 労働力の価値規定は，労働過程と〈再生産〉過程の絡み合いの中で考察されるべき

## 3 労働過程

### (1) 労働と熟練

- 対象である自然を变形する労働過程は，反作用的に人間の自然力をも変容させる
- 労働の繰り返しとそれによる経験の蓄積が精神的力能の基盤をなす=熟練の形成

### (2) 熟練の構造

#### (a) 横の熟練と縦の熟練

横の熟練 さまざまな労働を行うことができるという労働能力の多様性

縦の熟練 同一労働の反復による労働能力の深化

## (b) 生産手段に対する熟練と人間に対する熟練

### 生産手段に対する熟練

横の熟練 種々の労働手段・労働対象を扱えること

縦の熟練 同一労働の反復による生産手段の複雑さへの対応

### 人間に対する熟練 協働性=同時性・継起性・並行性・分業性についての知識の深化

横の熟練 さまざまな労働者と協働し、多様な分業体系のもとで労働することによる

縦の熟練 共同作業の反復による

また協業には、指揮の介在による精神的力能の二重化がありうる。

## 4 資本主義の下での労働過程・労働市場・〈再生産〉過程

### (1) 資本にとっての熟練の両義性

- 商品生産の副産物として、費用なしで労働者の熟練のメリットを享受できる
- 熟練は労働者に内属し、労働者の個体から切り離せない

→ 資本と労働力との関係が複雑になる

### (2) 労働力商品化の多様な型

#### (a) 全面的熟練と自立型労働市場

- 高い取引力を備えた全面的熟練労働者
  - － 横の熟練を持つ労働者は特定の資本の下で継続的に労働する理由はないから
  - － 資本は繰り返し同じ労働者を雇うことで熟練のメリットを手にしようとするから
- 出来高賃金
  - － 資本は高い移動可能性を持った横の熟練をもつ労働者に生存費を払う動機が無いから
  - － 全面的熟練労働者は労働過程に対する統率力を保持しており、労働の成果と無関係に賃金を払うことはできないから

→ 高賃金

#### (b) 一面的熟練と相互依存型労働市場

##### 横の熟練の解体

- 労働過程の工程への分割
- 部分工程への労働者の固定

↓

- 縦の熟練の深化 → 資本と労働の間の相互依存的な関係
  - 資本は個別労働力を損なわないように生存費を支払う
    - － それでも労働過程の変革、景気変動、個別労働者の交替、生活手段の入手経路・生活単位の多様性のため、単一の賃金水準にはならない。
    - － but ありうる1つのパターンは、長時間労働による生活時間の切り詰めを、賃金増による生活手段

- の購買増でカバーし、賃金による生活手段の買戻しを基軸とした労働力の価値規定
- 横の熟練の科学的知識としての独立化 → 「養成費」概念の成立

(c) 不熟練と従属型労働市場

縦の熟練の解体 → 賃金水準の生存費以下への低下 → 賃金以外での生活手段の取得

- 長時間労働による賃金増加は、資本が長時間労働による労働効率の低下を忌避するため妨げられるから
- 長時間労働は生活時間の切り詰めを必要とし、賃金以外の生活手段の取得の障害になるから

論点

■ 「労働力の外部性」の意味

「非資本」規定によって得られたはずの労働力の外部性という洞察」（172 頁）とは何か。

■ 生活手段の獲得経路の多様性の指摘

- 「〈再生産〉過程が多様であるからこそ、古典派経済学が想定したように賃金低下や失業が人口減に直ちに結びつくわけではなく、過剰人口が持続的に滞留し続けることになるのである」（178 頁）  
この命題は正しいか。
- 生活手段の獲得経路の問題と労働力が「多様な商品群」（179 頁）であることとはどういう関係にあるのか。

■ 熟練の理解について

様々な労働ができるようになる「横の熟練」は、同一労働に習熟する「縦の熟練」と等位にはならないのではないか。同様に、生産手段に対する熟練を人間に対する熟練と等位に置くのも問題ではないか。

熟練形成あるいは合目的性による労働の多様性の発揮が簡単に考えられすぎているために、熟練の再形成の場としての産業予備軍の意義が取り出されていないことになってはいないか。